

# 本

## 芸術に宿る「何か」 現代にも響く感性

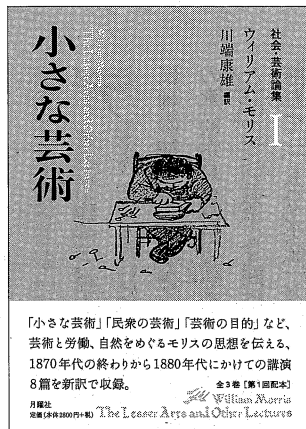
鈴木杏子

すずき とうこ / ライター

「小さな芸術」とは、絵画や彫刻より格下に扱われてきた手仕事の工芸を指す。モリスは「小芸術（レツサー・アーツ）」、民藝運動の柳宗悦は「下手ものの美」と呼んだ。いずれも芸術と社会、人と自然との間に有機的なつながりを結び直す試みだった。

モリスの問題提起は、皮肉なほど現代と呼応している。人任せにした仕事の見張り役という退屈な仕事への批判はグレイバーのブルシットジョブ論に重なるし、「われわれに起こりうる最悪のことは、目に見えるさまざまな悪を意気地なく我慢することです。これ以上にひどい災難や混乱はない」という苦言は、無関心や同調圧力がはびこる現代社会への警鐘として重く響く。

モリス研究の第一人者である川端康雄氏の新訳は、詩人でもあったモリスの感性を人間味溢れる語り口で蘇生させる。そして気づかされるのは、アートとは絵画や彫刻自体を指すのみならず、そこに宿る「何か」ではなかったかという問いだった。モリスの思想を今どう受け止めるのか、残り2巻を通じて考えてみたい。



『小さな芸術』

ウィリアム・モリス=著

川端康雄=編訳

月曜社 定価3080円(税込)

ISBN978-4-86503-151-5

19 世紀の英国で、工芸家、社会運動家として生きたウィリアム・モリス。大量消費社会を批判し、芸術は一部特権階級の人たちのためではなく民衆に開かれたものだと訴え、アーツアンドクラフツ運動を導いたモリスの講演とエッセイを集めた全3巻のうち第1巻が刊行された。

「小さな芸術」とは、絵画や彫刻より格下に扱われてきた手仕事の工芸を指す。モリスは「小芸術（レツサー・アーツ）」、民藝運動の柳宗悦は「下手ものの美」と呼んだ。いずれも芸術と社会、人と自然との間に有機的なつながりを結び直す試みだった。

モリスの問題提起は、皮肉なほど現代と呼応している。人任せにした仕事の見張り役という退屈な仕事への批判はグレイバーのブルシットジョブ論に重なるし、「われわれに起こりうる最悪のことは、目に見えるさまざまな悪を意気地なく我慢することです。これ以上にひどい災難や混乱はない」という苦言は、無関心や同調圧力がはびこる現代社会への警鐘として重く響く。

モリス研究の第一人者である川端康雄氏の新訳は、詩人でもあったモリスの感性を人間味溢れる語り口で蘇生させる。そして気づかされるのは、アートとは絵画や彫刻自体を指すのみならず、そこに宿る「何か」ではなかったかという問いだった。モリスの思想を今どう受け止めるのか、残り2巻を通じて考えてみたい。